

せばそれで参られるのである。

〔白川消息〕に出づ

よしや餘のこころをするにしても、念佛を申しノ、これをするのであると思ふて、決して餘のこころをしながら念佛を申すのだと思ふてはならぬ。

〔一言芳談〕に禪勝房云く、故上人の教へに云々あり

自然の道理といふこころがある。火焰が空にのほり、水の低きに從ふて流れるのも、同じ果物の中に酸いのがあり、甘いのがあるのも、これはみな自然の道理である。これと同じやうに、阿彌陀佛の本願はみ名をもつて罪惡深い衆生を淨土へ導かうと思ひなされたのだから、たゞ一向に念佛さへ申せば、佛がお迎へ下さるのである、これ自然の道理で何等の疑ひもないこころである。

〔念佛問答集〕に出づ

法然上人語錄

人の命は食時中にもむせて死ぬこころがあるのであるから、南無阿彌陀佛を嚙んで、南無阿彌陀佛のみ下すべきである。

〔念佛問答集〕に出づ

私は烏帽子もつけないやうな男である。恐ろしい十惡をつくる法然房、愚痴のかたまりである法然房が、佛のお誓を信じて、念佛して、淨土へ参らして頂かうといふのである。

〔物語集〕〔西宗要〕に出づ

もしこの願がかなはなければ佛にはなりません。凡愚な私をおめあてにおたて下された本願の念佛には、ひりりだちをさせて助成をさぬのである。助成といふのは自分の身についてゐる智慧を念佛の助成にし、戒行を守るこころを助成にし、道を求める殊勝な心を助成にし、ものをあはれむ心を助成にするのである。然し善人は善人ながら念佛を申し、悪人は悪人ながら念佛を申して、たゞ生れつきのまゝに、何等の外面をかざる心もなく念佛する人を、念佛に助成をさぬ人といふの

である。こはいふもの、悪をあらためて善人になつて念佛を申す人こそ佛の御意にかなふたものであらう。佛の御意にかなはぬものだから、かうでもあらうか、あゝでもあらうかこはからふてゐて、きつこおたすけにあづかるに間違ひはないといふしつかりした心の起らない人はそれこそおたすけにあづかれない人であらう。

〔念佛問答集〕に出づ

勢子に追ひたてられた鹿も、自分の友に眼もくれないで、眞つしぐらにおもひきつて向うの方へ逃れば、幾重人が取り捲いてゐるやうにも、きつこ逃げ了せられるものである。それと同じやうに佛のお力を深く心に信じて、更に餘のこころに心をかけず、一心に浄土へ参らして頂きたいと思ひつめねばならぬ。

〔念佛問答集〕に出づ

巾一丈の堀を飛び越さうと思ふ人は、一丈五尺のこころを飛び越さうこはけまねばならぬ。それこ

同じやうに、間違ひなく浄土へ参らして頂きたいと思ふ人は、おたすけは間違ひないといふ信をこつてあひはけまねばならぬ。

〔物語集〕、『東宗要』に出づ

御没くなりになつた先の御師匠(法然上人のこころ)常のお言葉に、「私は烏帽子もきない法然房である。赤兒のやうなもの、黒白も判らなければ、是非邪正も知らぬ愚かな智慧のないものであるが、たゞ佛のお力におすがりして念佛を申して浄土へ参らして頂くこころを信じてゐるだけである。釋尊は念佛して浄土へ参らして頂けよとお勧めなされ、阿彌陀佛は念佛を申せよ、さすれば迎へこつてやらうこ仰せになりました。たゞこの一事を信じてゐるだけで、更に餘のこころを知らないものである」云。

〔西宗要〕に出づ

御師匠(法然上人)の常もの仰せに「源空は智慧と徳をもつてこれまで人を教化して来てなほ力及ばないのに、法性寺の空阿彌陀佛は愚かな智慧のないものであるけれども、よく念佛の大先達とし

てあまねくその化導のいたらぬところにてはない。もし源空が今度人間に生れたならば、大きな愚かな智慧のないものになつて、一心に念佛をつとめる人にならう」仰せになりました。

〔勅修御傳〕「九卷傳」に出づ

○

隨蓮が申されるやうには、先の御師匠(法然上人)は「念佛にはこれいふわけあひはないが、そのこれいふわけあひのないのをわけあひにするのである。たゞひたすらに佛のお誓のおこごばを信じて、念佛を申せば間違ひなくおたすけにあづかれるのである」これいふてまつたくまごの心ご深く信する心ご、善根功德をふりむけておたすけにあづかりたい願ふ心ごの三心のこごさへも仰せにならなかつたご。

〔勅修御傳〕に出づ

○

おたすけにあづかれるかごうかごいふごを、よく自分の心に占ふてみるがよい。その占ひかたは、念佛さへ油断なく申されるならば、それでおたすけは間違ひはないご知るがよい。もし念佛が疎

想であれば、次の世に淨土へ参らして頂きたいごはかなふまいご知るがよい。この占ひをしてわが心をはけまし、三心を何一つ不足なく具へるか、具へないかをも知るがよい。

〔念佛問答集〕に出づ

○

現世をすすすには念佛の申されるやうにしてすすすがよい。念佛のさまたけになるやうなごは、さんなごであるにしろ、よろづをすて、これをこめねばならぬ。聖になつて念佛が申されなければ、妻を娶つて念佛を申されるがよい。妻がゐるは念佛のさまたけになつて申されないやうであるならば、聖になつて念佛を申されるがよい。自分の家には念佛が申されないやうであるならば、遊行して念佛を申されるがよい。遊行しては念佛が申されないやうであるならば、家にて念佛を申されるがよい。自分の稼ぐだけの衣食では十分でなくて念佛が申されないごいふごであるならば、他人の扶助を受けて念佛を申されるがよい。他人に扶助られては念佛が申されないごいふごであるならば、自分で稼いで念佛を申されるがよい。一人では念佛が申されないごいふごであるならば、同朋と一緒に念佛を申されるがよい。同朋と一緒にでは念佛が申されないごいふごであるならば、一人

籠つて念佛を申されるがよい。

抑も衣食住の三つのものは念佛の助業があつて、自身を安らかにして、念佛して淨土へ参るためにはどんなことでもみな念佛のたすけになるものである。身に何一つ善根功德もなければ、たゞ十悪や五逆の罪をこまゝして、三塗へ還るやうな身でさへも、捨てがたくよく力になつて養ふではないか。まして極樂往生ほごの大事をはげんで念佛を申す身であれば、どんなことをしても育んで助けねばならぬ。もし念佛の助成と思はないで、身のためにたゞ貪り求めるやうなことは、三惡道へ墮ちる業になるのである。極樂往生の念佛を申すために、自身を貪り求めるのは、往生の助業になるべきである。すべて萬事はこの通りである。

〔念佛問答集〕に出づ

大勢のものが寄り集まつて後生のことを話しあふてゐた時に、「魚を食ふ人が極樂へ往生するものである」こいへば、「いや魚を食はぬものこそ極樂へ往生するのである」互に言ひ諍ふてゐたのを、御師匠(法然上人)お聞きなされて「魚を食ふものが極樂へ参られるこいふことであるならば、鵜はよ

く魚を食ふから、あの鵜こそ極樂へ参るこことであらう。また魚を食はぬものが極樂へ参られるこいふことであるならば、猿は魚を食はぬから、あの猿こそ極樂へ参るこことであらう。實際極樂往生は魚を食ふこか、食はぬこかこいふこことによつて決定するのではなくて、たゞ念佛を申すものだけが往生するのである。源空は信じてゐる「こ仰せになりました。

〔教修御傳〕に出づ

私はお聖教を拜見しない日にてはないが、木曾の冠者義仲が花洛に亂入したとき、たゞの一日お聖教を拜見しなかつたこことがある。

〔教修御傳〕に出づ

沙彌道遍(石川)が申されるやうには、先のお師匠(法然上人)の仰せには、「極樂往生のためには念佛が第一である。その外には學問をしてはならぬ。しかし念佛して淨土へ参らして頂くこ仰せられるほごにこれを學ばねばならぬ」。

〔東京要〕、「和語燈錄」に出づ。

自分の力をたよりこして、この世で誇りを開かうとする聖道門の修行は、智慧をきはめて生死の境涯を離れるのであるし、佛のお力におすがりして、念佛を申して浄土へ参らして頂く浄土門の修行は愚癡にたちかへつて極樂へ生れるのである。

〔救修御傳』に出づ。〕

上人が室の泊にお着きなされた時に、上人のお出を聞きつたへた遊女が、上人の船にやつて来て、「この罪惡の重い汚れはてた身が、さうしたならば佛のおたすけにあづかれませうや」三お尋ね申したので、上人は大層哀れにお思ひなされて、「そのやうな稼業をして渡世をするといふ罪惡はきはめて重いから、その受ける酬報の程も測り知ることが出来ぬ。もしさうした稼業でなしに、何か他にその日の暮らしの出来るやうな方法があるならば、一日も早くその稼業をやめるがよい。然し他の稼業の方法もつかず、また自分の命をかへりみない程に道を求める心もおこらないやうならば、たゞそのまゝ

で一心に念佛を申されるがよい。阿彌陀如來に申されるお方は、そのやうな罪の深いものゝためにこそ廣大なお慈悲のお誓ひをおたてなされたのであるから、たゞ深く彌陀の本願をたのんで、自分はこの賤しい稼業をしてゐるからといふて、敢て自分を卑下するやうなことがあつてはならぬ」三仰せになり、彌陀の本願をたのんで念佛を申せば、間違ひなく浄土へ参らして頂けることをねんごろに教へられたから、遊女は隨喜の涙を流したといふことである。

〔救修御傳』九卷傳』に出づ、上人遠流の途、室の泊に寄港せられた時の遊女への教化のお詞である。〕

源空が流刑に處せられたからといふて、決してこれを恨みに思ふてはならぬ。そのわけは源空ももう齡八十に間もないことである。よしや師匠に弟子がいくら同じ京洛に住んでゐたとしても、果敢ない世の慣らひであつてみれば、この世の互の別れもいづれ近いことであらう。よしや遠く海山を隔て、お互が別々に住んでゐても、等しく本願の念佛を力にするものであつてみれば、浄土で再會出来ることに何の疑ひがあらう。浮世を厭ふて、この世のくらしにいくら倦いたからといふても、生きながらへるのは人の身であり、いくら死にたくないといふて惜んだところが、いつかは死なねばならぬ

果敢ない人の命である。してみれば、何も別に居所が互に離れてゐるからこいふことではない筈である。そればかりでなく、念佛が洛陽に榮えてより長の年月のこことであるから、こちらには何の思ひ残すところもないが、たゞ邊鄙な田舎の方へ出かけて、凡愚な田夫野人の間に念佛をひろめたいものである。源空の年來の本意であつたのであるが、これまでには時節が到来しなかつたので、その本意をはたすこことが出来なかつたのである。こころが今この縁によつて年來の本意がまげられるこいふこころは、まごころにもつて朝廷の御恩ごもいふべきである。

佛のお力におまかせして、念佛申しておたすけにあづかる念佛往生の教を世に弘めるこころを、いくら人が妨害をして停めやうこしても、それによつて教そのものは更に停められるやうなこころがない。衆生を濟はねばをかないこいふ諸佛のお誓こいひ、念佛するものを必ず護らむこの神々のお約束こいひ、いづれもこの衆生めあてのねんごろな深いお誓である。すればなんで世間の人の思はくを恐れ憚つて佛の經説や、人師の論釋の本意を隠さうや。たゞしかし源空が創めた佛のお力におまかせして、念佛して淨土へ參らして頂く淨土門の教は、濁りはた末の世の衆生が、生死の境涯を離れて、おたすけにあづかるに間違ひのない肝要な道であるから、いつも念佛を申すもの、傍らを離れるこころ

なしにお護りなされる神々が、言語道斷の障礙をするものであるこころ、定めしおこがめなされるこころであらうが、そのこころのみがまづかはれる。生きこし生けるものは、よくく原因結果の道理の虚しくないこころをおもひあはすがよい。御縁がつきなければ、なんでまた再會するこころがなからうや。

○ 「敕修御傳」に出づ、上人流刑に處せられしとき、門侶に對せられた誠めである。

また一人の弟子に對ふて、たゞ一向に念佛して更にその餘の行を雜へず、ひこへに阿彌陀佛の本願をたのむ義をお説きなされたが、その時弟子の西阿彌陀佛が參つて、「お師匠さまそんなこころをこの際にして申されてはなりません。またみな衆生もお返事を申しあげてはなりません」申した所上人の仰せられるやうには、「爾は佛の經説や、人師の論釋の文を見ないのか」こころ。西阿彌陀佛は「佛の經説や、人師の論釋の文は勿論仰せの通りであります。御流刑になられる今も尙ほ、そのやうなこころを申されては、それこそ世間の人の機嫌を損ふばかりであります」こころお答へ申したので、上人は「よしや源空は死刑に處せられるにしても、こころしてこの旨趣をいはずにあられやうか」こころ仰せになりましたが、まごころその面にあらはれて、これを見奉た人々はみな涙をおこしたこころである。

○ (淨土圖記)に出づ、上人流刑の砌りに弟子へ對せられたる訓誡である。

法蓮房の申されるやうには「古から先徳にはみなその遺跡がありますが、御師匠さまには堂宇一つの建立もありませんので、おなくなりになられた後には、一體ごをお師匠さまの遺跡をしたら宜しう御座いますか」ごお尋ねしたところ、師の上人は「遺跡を一廟に限れば遺法があまねくゆきわたるごいふことがない。予が遺跡は諸國の津々浦々に充ちてゐるであらう。そのわけは念佛して淨土へ参らして頂くごいふ淨土門の樹立は愚老が一生の教化である。だから念佛を修するごころであれば、それがごであらうが、貴いもの、賤しいもの、ごいふごにか、はりなく、海人や漁師のまよまでもみなこれ愚老が遺跡であらう」ご仰せになりました。

○ (教修御傳)「九卷傳」に出づ、遺跡についての誠しめのお詞である。

大正十二年三月十一日印刷
大正十二年三月十五日發行

三經七祖之部
定價七圓五拾錢

著者所有

編輯者 右代表者 意 眞宗聖典刊行會
裝釘者 廣 瀨 南 雄
大 瀧 含 雄
西村七兵衛
發行兼印刷者 京都市下京區中津數屋町九東入
二十八番町二十二番戸

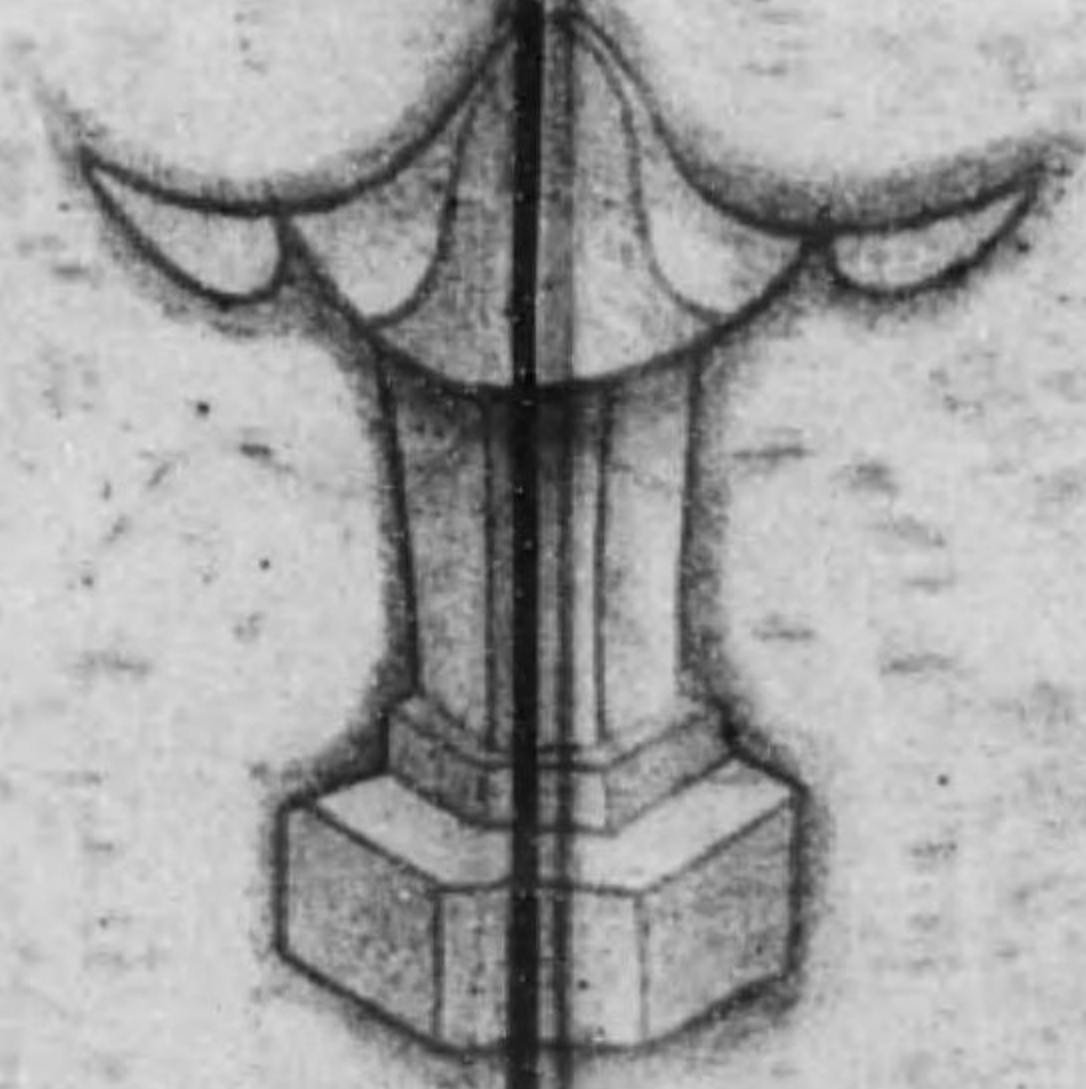
發行所

京都市下京區中津數屋町
四十五番八番
大坂市下町一七〇四番
番口座

法藏館

内村 田 文 泉 式會社 印刷部 製本

104
159



終